

TOKYO DOME HOTEL

インテリア –アートワーク–

東京ドームシティにあるホテルにふさわしく、東京ドームホテルのアートワークは、スポーツ、音楽、アミューズメントなど、アクティブなテーマの作品が多数飾られています。一方、婚礼フロアは生命力やあたたかな愛が伝わってくるシャガールや、宇宙をテーマにしたB1階と42階の宴会場は各宴会場名にあった篠崎正喜によるオリジナル作品など、それぞれの施設のテーマに沿ったアートワークが展開されています。

スポーツ・音楽・アミューズメント関連

知る人ぞ知る、ロビーの「王貞治」と「長嶋茂雄」

ホテルの顔とも言えるロビーの奥に並んで飾ってあるのは、テッド・タナベ作の「No.1王貞治」と「ミスター長嶋茂雄」と題したサイン入りリトグラフ。スポーツアーティストのタナベ氏が描く現役時代のおふたりの絵は躍動感に満ちています。宴会場へのエスカレーター前という、比較的目立たない場所に展示されていますが、隠れたフォトスポットとして人気を集めています。



テッド・タナベ作「ミスター長嶋茂雄」

客室に飾ってあるギアマン作品はホテルオリジナル

1006室の客室の中で、9階～22階はスポーツを、26階～38階は音楽をデザインのモチーフとしています。スポーツフロアの客室にはサッカー、テニス、ヨット、乗馬、音楽フロアの客室には弦楽器を中心としたさまざまな情景を色彩豊かに描いたギアマンの小作品が一部屋に4点ずつ飾られています。いずれも東京ドームホテルのために描かれたオリジナルで、そのあたたかな色調は客室のインテリアとも調和してくつろぎの空間を演出しています。



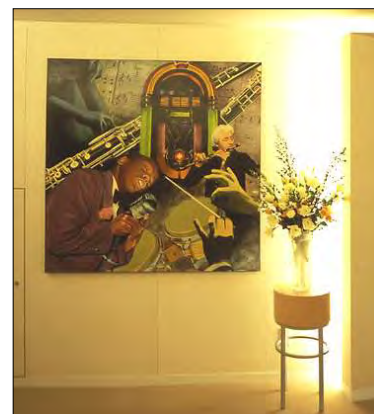
ギアマンのオリジナル作品

東京ドームホテルにおけるギアマン作品の点数は、客室内だけで約4,000点、パブリックエリアを合わせると4,200点にのぼります。

23階～25階は特別テーマフロア

テーマ性をより強く表現したのが特別テーマフロアで、23階がスポーツ、24階がアミューズメント、25階がミュージックをテーマにしています。ディズニーのホテルやレストランなど、テーマ性のあるデザインにかけては世界有数の米国パーカー・ブレイク社がこの3フロアを手掛けました。

エレベーターホールには、テーマに沿った縦横142cmの正方形のオリジナル壁画がかかっているほか、廊下には各フロアに10点のアートが飾られています。例えば、スポーツフロアでは、アンティークチケットやプログラムのコラージュや、野球カードコレクション、アミューズメントフロアでは、古き良き時代の遊園地の白黒写真やポスター、サーカスをモチーフにした絵画、また、ミュージックフロアでは組曲「くるみ割り人形」のイラストと楽譜が並べて飾られていたり、少しレトロなアメリカをバリエーション豊かなアートで感じることができます。さらに、客室には各テーマのオリジナル絵画6点のうち、4点を組み合わせたフレーム1点が飾られています。



25階 特別テーマフロア
「ミュージック」の
エレベーターホール

39階～41階のエクセレンシスイートはギアマンとマティスの競演

ハイグレードな客室50室を備えるエクセレンシフロアでは、55～66㎡のエクセレンシスイート17室でギアマンとマティスの競演をお楽しみいただけます。マティスのジャズシリーズがシンプルモダンな客室をよりモダンに演出しながらも、対照的なギアマンの暖色系の色使いと溶け込んで、落ち着きあふれる空間となっています。

ワイズバッシュが音楽を奏でる6階のダイニング「ドゥ ミル」とサロン

東京ドームホテルの中で最もエクスクルーシブなフロアにあるのがフレンチレストラン「ドゥ ミル」と2つのダイニングサロン。そこに飾られているのがクロード・ワイズバッシュの版画です。「チェロ奏者」「デュオ」「二重奏」など、落ち着いた色彩と鋭い感覚が特徴のワイズバッシュの絵からは、今にも音楽が聞こえてきそうです。ワイズバッシュの作品としては他に「荒馬」など、ダイナミックな馬の動きをとらえたものも何点か飾られています。



マティスの作品



クロード・ワイズバッシュ
の作品

音楽をテーマにした「アーティスト カフェ」はフロア全部がアートワーク

最上階のレストラン「アーティスト カフェ」はホテルの中でも異色のデザイン。東京ドームホテルは、外装と内装のすべてを丹下健三デザインとしていますが、「アーティスト カフェ」だけは米国マイ・デザイン社によるものです。

音楽の持つテクノロジーの要素と、音そのものをデザインで表現する要素の2つを融合させた意匠で構成されており、テクノロジーを感じさせる要素は、主にエレベーターホールに表現されています。エレベーターホールの8つのエレベーター扉には、異なる音楽ジャンルが金属エッチングを模したグラフィックにより描かれています。一方、レストランスペースに入ると、そこは音をビジュアルで表現した空間に変わります。「流れに身を任せる空間」をテーマとし、時間が止まり、波打った水が固まり、音楽が止まったその一瞬のイメージを切り取ったような空間を、天井、壁面、家具、調度品などに描いています。また、最上階からの素晴らしい眺望を絵画のように楽しめるよう、アールヌーボー様式の「額縁」を窓枠に採用しています。アールヌーボーは自然をお手本として確立された様式。音楽のリズムや旋律を視覚的に表現するモチーフとして、レストラン全体をやわらかく見せる効果があります。



「アーティスト カフェ」エレベーターホール

その他の主なアートワーク

メインロビーを飾る、平山郁夫作の大型陶版画

ホテルに入ってまず目にするのは、フロントカウンターと相対してアトリウムいっぱい展示された平山画伯の「平和と繁栄」と題した陶版画です。この作品は「永遠の世界平和と民族間の深い友情を願って」制作されたもので、幅 283.5cm x 高さ 547.0cm に3人の天女が海のような懐深い空間を浮遊する様が描かれています。



平山郁夫画伯作「平和と繁栄」

婚礼施設には愛を象徴するシャガール作品を多用、パティオは白石齋作

5階の婚礼フロアには「色彩の魔術師」といわれたマルク・シャガールの作品が多く飾られています。シャガールのメインテーマは、地上の重力の法則を超えた永遠の愛。自由に空を飛び恋人たちの絵や、聖なる「エルサレムウィンドゥ」シリーズなど、神聖な愛を誓う婚礼の場に相応しい、夢ある作品が並んでいます。

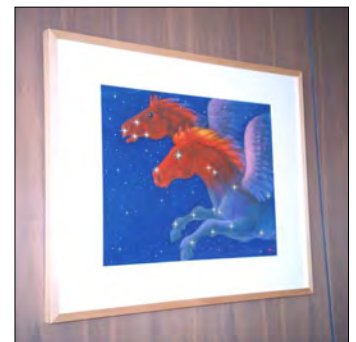
また、光のチャペルで挙式をあげたカップルがフラワーシャワーの祝福を受ける隣接の祝福のパティオは、白石齋氏の「^{ひとし}翻る^{ひるがえ}地表^{だいち}」と題した作品です。地球を覆っている地表の「土」は砂塵となって旅をします。その地表が破片となって、空や海の上に浮かんだイメージを形象化したのが本作品で、有田焼の製法を生かしたレリーフとなっています。



パティオは白石齋氏作「翻る地表」

地下1階と42階の宴会場は宇宙がテーマ

「オーロラ」「シンシア」「シリウス」「アリエス」など、宇宙をテーマにデザイン、命名された宴会場8室には、篠崎正喜氏のオリジナルアクリル画が飾られています。深遠なる宇宙の世界を夢あふれるタッチで描いた作品は、絵本などを数多く手掛けた篠崎氏ならではの作品です。



宴会場「ペガサス」に飾られている篠崎正喜氏の作品

● Profile ●

テッド・タナベ (Ted Tanabe)

自らをスポーツアーティストと称し、アスリートが全力で挑む表情や躍動感を絵画に最大限表現している。作品の中には、東京ドーム野球殿堂博物館のロビー陶壁画や入口外壁陶壁画が含まれる。

ポール・ギアマン (Paul Guiramand)

1926年、フランス生まれ。パリ国立美術学校に学び、ブリアンションに師事する。1952年にローマ大賞を受賞後、サロン・ドートンヌ、サロン・ド・メ、青年絵画展等に出品。官能的な赤系統を主体にした機知に富んだ色面構成に特徴があり、ヘミングウェイ、アポリエール等の挿絵も描いている。68年以降、数多く来日し、個展を開いている。

ティス (Henri Matisse)

1869年、フランス生まれ。法律を学んだが、1892年、画家を志してパリにでる。エコール・デ・ボザールでギュスターブ・モローに師事する。後年、平面化単純化の方向に進み、1941年以降は南仏に定住して切り紙絵に打ち込んだ。彫刻、版画、詩集の挿絵も手掛けた。1954年没す。

クロード・ワイズバッシュ (Claude Weisbush)

1927年、フランス生まれ。ナンシー国立美術学校に学び、版画技術を会得。現在、サン・ティエンヌ国立美術学校教授。パリ・ピエンナーレ、サロン・ドートンヌ、青年画展に参加し、「時代の証人展」には4年連続出品している。1961年、クリチック賞受賞。暗い色彩と鋭い感覚で人物を表現主義的に描く。

平山郁夫 (Ikuo Hirayama)

1930年、広島生まれ。52年、東京美術学校（現 東京芸術大学）日本画科を卒業。53年、第88回院展にて「家路」が初入選。64年に日本美術院同人に推挙される。67年、法隆寺金堂壁画再現模写に参加。89年東京芸術大学長となる。（95年に退官）91年、パリのギメ国立美術館を皮切りに、ワシントンD.C.、北京、東京で「平山郁夫シルクロード展」を開催。現在（財）日本美術院理事長、日本育英会会長、ユネスコ親善大使・世界文化遺産担当特別顧問、文化功労者。

マルク・シャガール (Marc Chagall)

1887年、ロシア生まれ。両親はユダヤ人。ペテルスブルグの美術学校で学んだ後、1910年、パリに出てアカデミー・シルグに通う。初期作品は印象派だったが、ピカソを知り立体派に感化される。17年、革命後の故郷で美術人民委員に選ばれるも23年パリに戻る。やがてロシア民族の図太い明るさとユダヤ民族の暗い思索性、神秘性を併せたシュールレアリスム作風を確立する。“色彩の魔術師”といわれる豊麗な色空中を浮遊する超現実的幻想、詩情などで独自の世界を展開。85年、南仏にて死去。

白石齋 (Hitoshi Shiraishi)

岡山生まれ。栃木県益子、京都、佐賀県有田、岐阜県多治見等で陶器を学ぶ。1962年「空間とやきもの」展を開いたのを契機に建築家との交流が始まる。63年デザイン事務所を開設（後に「白石齋デザイン研究所」と改称）。92年岡山の新アトリエで初窯開きと野外展を開催。主な作品は、多摩パルテノンのエントランスモニュメント（87年）、札幌後楽園ホテル（東京ドームホテルズ）の大宴会場とアトリウムのアート（88年）、東京競馬場のレリーフ「決闘」（93年）など。

篠崎正喜 (Masaki Shinozaki)

1945年、九州に生まれる。90年まで彫金、金属板の鍛金による立体制作を手掛け、それ以降、絵画制作を開始し、「劇団七曜日」の宣伝美術を担当する。92年、表面表現絵画の登竜門として有名なりキテックス・ピエンナーレの奨励賞受賞、94年同入選、96年、同特別賞受賞。絵本やポスター、CDカバー、テレビCM等、幅広く手掛ける。

本件に関する報道関係者の方のお問い合わせ先

東京ドームホテル

総支配人室 広報担当

〒112-8562 東京都文京区後楽 1-3-61

TEL.03-5805-2151 FAX.03-5805-2153

URL <https://www.tokyodome-hotels.co.jp>